

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その11－

－神奈川県とその周辺地域の様相（下北原遺跡第14号敷石住居址出土資料の編年的な位置付けをめぐって）－

縄文時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

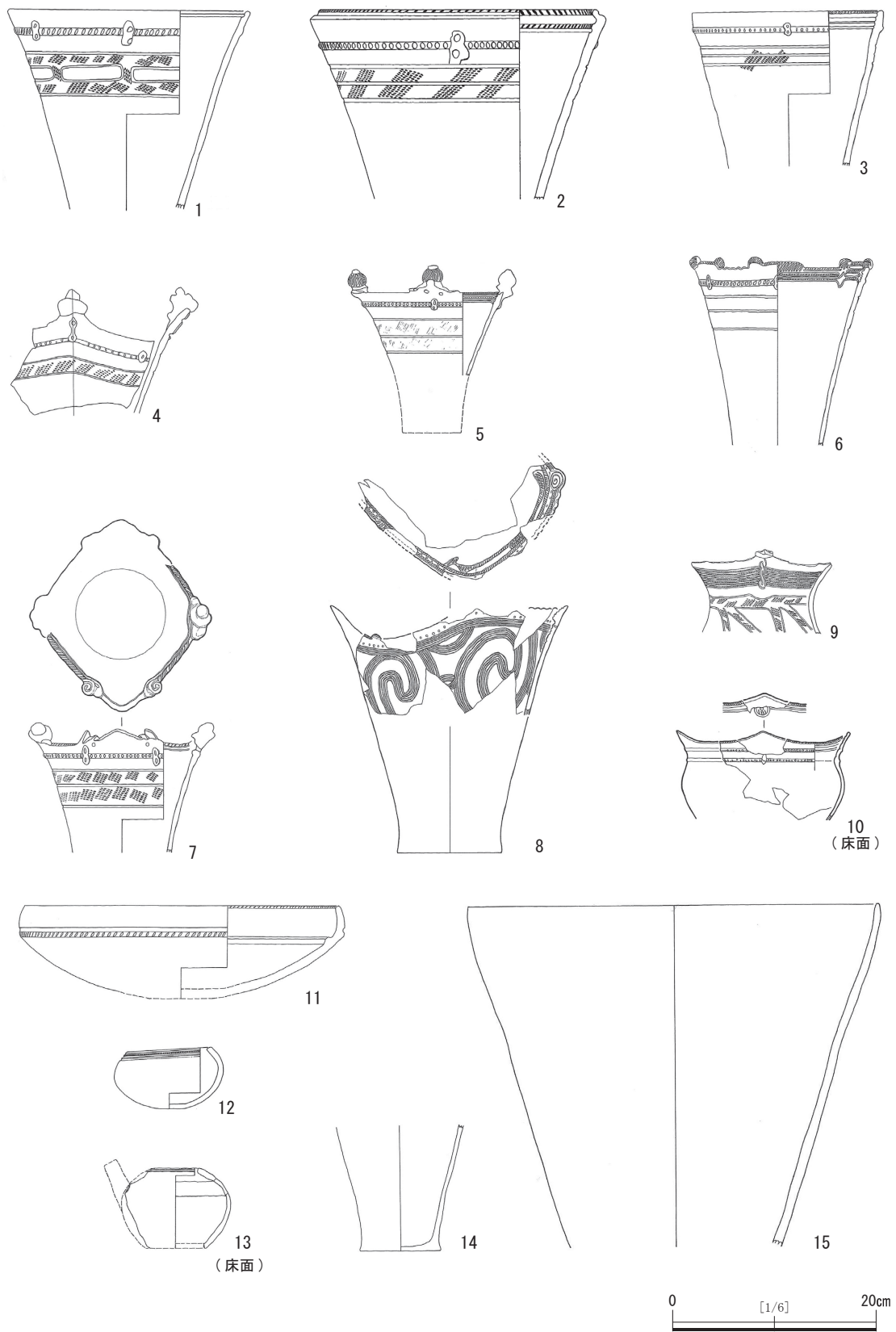
本プロジェクトでは、2009年度から2018年度にかけて、堀之内式土器文化期の様相について検討を行った。昨年度は、「かながわの土偶」をテーマとしたが、これは近年、注目される新資料の発見や、縄文時代後期集落の調査事例が多く資料数が増加していることを受けたものであった。これまで、本プロジェクトでは時期毎の県内資料の集積と分析を継続してきたところであり、引き続き加曽利B式土器文化期の様相について検討を行うところではあるが、後期前葉から中葉に分析対象となる時期をすすめるにあたって、まずは時間軸の基礎として土器編年を再検討しておきたい^(註1)。県内には、堀之内2式土器と加曽利B1式土器の境界についての議論（大塚1983、石井1984、秋田1996など）で、たびたび取り上げられてきた下北原遺跡14号敷石住居出土資料（鈴木ほか1977）があり、これを分析の端緒としたい。次に、東日本を中心とした各地域において、後期前葉から中葉にかけての土器編年研究がどのような視点で捉えられているのか、代表的な論考や報告書等を取り上げて概観する。神奈川県および周辺地域の該期の土器群の成り立ちや構造の分析から、加曽利B1式土器の成立要件について考察し、堀之内2式土器と加曽利B1式土器の境界を考える一助とする。

（註）

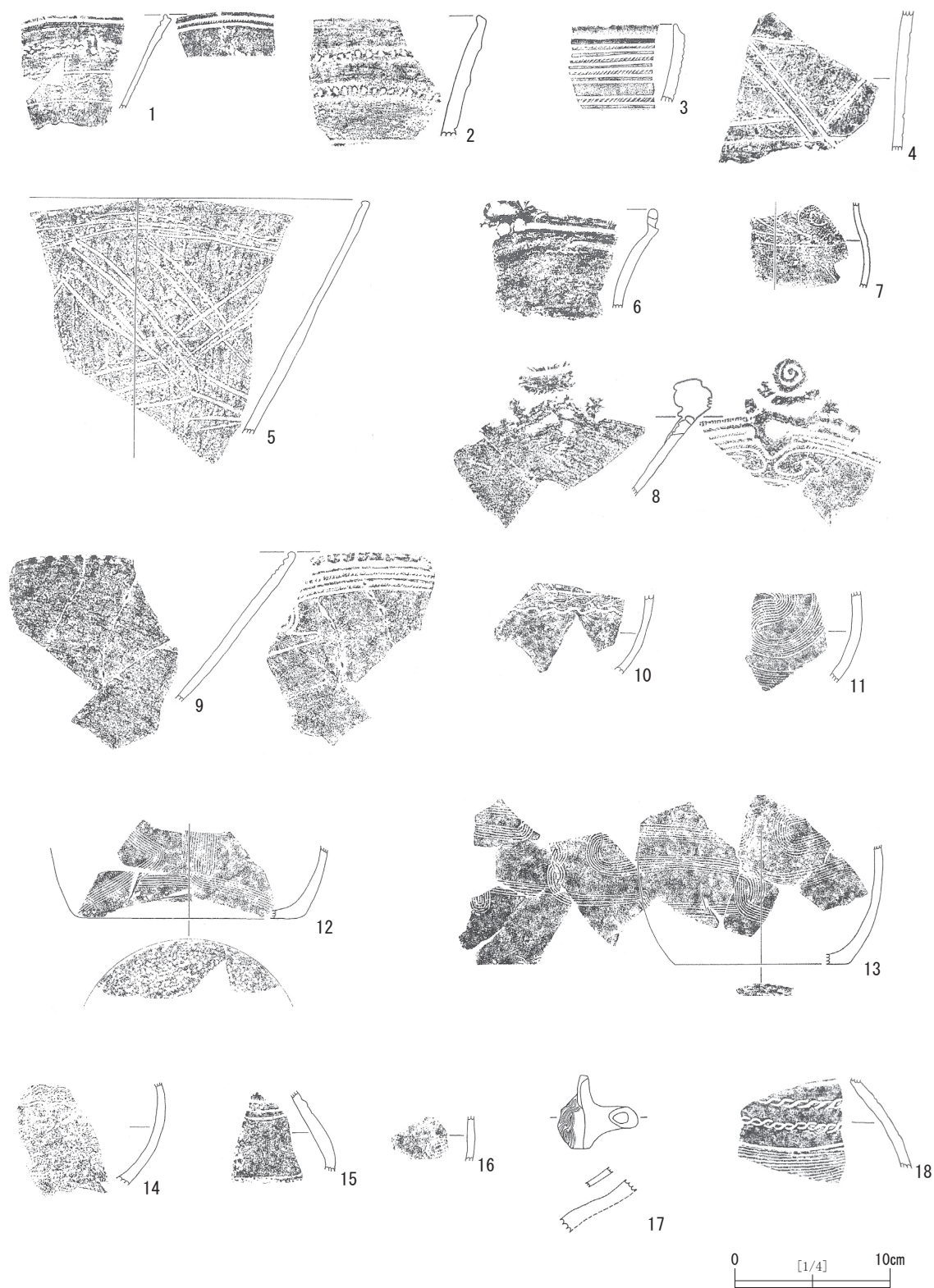
(1) 堀之内2式土器の編年については、すでに2013年当財団発行『研究紀要18』で提示しているところであり、基本的にはこれに従って分析をすすめる。また、同論考のなかで下北原遺跡14号敷石住居出土資料についても分析対象としており、堀之内2式「新段階後半」に位置付けている。今回の再検討は、各地域の研究動向を踏まえたうえでの同資料の位置付けの検討を行う。

2. 下北原遺跡14号敷石住居址出土資料について

元報告（鈴木1977）では、第14号敷石住居址土器群（以下、下北原14住資料）は大半が、第7群「縄文後期中葉の土器」（「加曽利BⅠ式期」）に分類されているが、第1図1（報告書では図版第93-1）、第2図1・5～7は第6群（「縄文後期初頭の土器」）に含められ、「堀之内Ⅱ式」に属するとされた。石井寛氏は堀之内2式の細分を論ずるなかで（石井1984）、下北原14住資料について触れ「私は鈴木正と同様、加曽利BⅠ式初頭と考え、」とし断定的ではないが、石井氏の堀之内2e式に後続するとの判断を示した。さらに、第1図1（石井論文では第26図229）については、堀之内2c、2d式？に分類し「この一個体を混入とすれば混乱はある程度回避されるが、」と述べ扱いに慎重な態度を示した^(註1)。石井氏が言及している鈴木正博士の加曽利B1式初頭（「加曽利B1a式」）は『日本先史土器図譜』（以下『図譜』）図版23の段階（「平行横線文の段階」）とされている（鈴木1980・1981）。この段階には、口縁部の隆帯はほとんど消滅したが、一部に継承する系列があり「加曽利B1a式武相系列」と呼んでいる。さらに、「加曽利B1b式」には「区切り縦線文」が出現する段階とする。これに対し、大塚達朗氏は、「加曽利B1式の初頭である「1a式」には区切り手法をもたない横帯文を持つ土器すべてを想定しているが、堀之内2式を含んでいるように思われる。」



第1図 下北原遺跡第14号敷石住居址土器 (1)



第2図 下北原遺跡第14号敷石住居址土器 (2)

との見解を示し、図版23の段階を加曾利B1式初頭とした場合、「1 a 式」には、それ以前を含んでいるとの判断を示し、下北原14住資料を堀之内2式終末段階に置く。また、田端遺跡の土坑出土資料をあげ、横帯文のみの土器と横帯文を区切る例が共伴する例が多いとした。(大塚1983)

秋田かな子氏(秋田1996)は当該資料を床面出土と覆土出土のものを分けて評価し、前者については「堀之内2式で問題ない」としたうえで、後者資料に注目する。秋田氏の堀之内2式から加曾利B1式土器への変遷観は、精製深鉢形土器の口辺部形態・突起形状の変化、単位文ないし区切り文のあり方、内面沈線の位置変化等を中心として組み立てられている。この視点から、覆土出土資料を堀之内2式終末とする。また、「石神類型」(下北原第7群第1類H・J・K型を中心)に着目し、「区切り文というものの大元は、堀之内2式と“石神類型”が交渉する中から取り込まれていくのではないかと述べた。下北原14号資料の精製深鉢について「単位文を持たない横帯紋」が特徴的であり、区切り文が顕在化する段階を加曾利B1式古段階との考えを示した。堀之内2式終末段階の「石神類型」との交渉を示す資料として、口縁部下に多条の横線を巡らせたような装飾(「横線帯」)をもつ資料(第1図9)を取り上げている。「横線帯」は堀之内2式の刻みを有する隆帯と対応するのではないかとする^(註2)。

堀之内2式と加曾利B1式の境界問題の議論に関して、下北原14住資料の評価を概観したが、『図譜』図版23を加曾利B1式初頭の標識として^(註3)、区切り文を持たない横帯文の顕著な段階設定の可否・連続性、そして区切り文の出現の経緯についての検討に進展している。

(註)

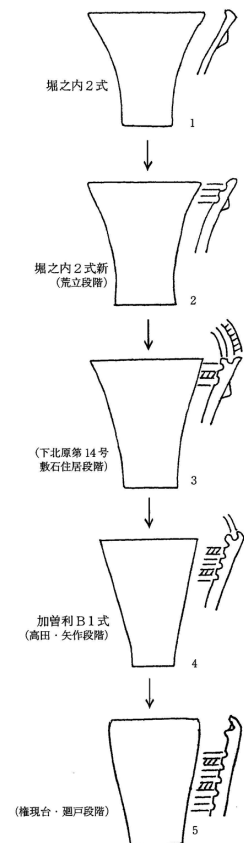
- (1) 石井氏も触れていたように2 d、2 e 式については一括資料が少ないという課題が残されていた。
- (2) 秋田氏は関東地方における「石神類型」の在り方を(秋田1997)で再論している。
- (3) 福田貝塚出土の注口土器の型式認定についての議論(秋田1994、鈴木1995)は、標識資料の理解方法におよんでいる。

3. 周辺地域の編年研究動向

■南関東東部

新屋雅明氏の論考(新屋2015)および、これに対する大塚達朗氏の評価(「解題」(大塚2015))を取り上げ、当該期の土器編年研究について概観する。なお、新屋氏の論考については前節では触れていないこと。また、氏の論考は寿能泥炭層遺跡出土資料を検討するなかで考察されたものであること、大塚氏の解題の内容は「第9回縄文セミナー」での議論の問題点にも及んでおり、新屋氏の方法論とともに土器編年研究の方向性理解が端的に示されていること等から変則的ではあるが、ここでみていくこととする^(註1)。

新屋氏は、堀之内2式から加曾利B1式への平行沈線文土器の変化を模式図(第3図)として提示した。ここでは、器形・口縁部形態・内文の発達・口唇部への加飾等が変遷を捉えるうえでの特徴とされる。1段階は平行沈線文以前の段階、2段階「荒立段階」(『図譜』図版58)、3段階「下北原第14号敷石住居段階」、4段階「高田・矢作段階」(『図譜』図版23)、5段階「権現台・廻戸段階」(『図譜』図版24)として、各段階の標識的な資料が示された。堀之内2式と加曾利B1式



第3図 堀之内2式から加曾利B1式への口縁部形態変化の模式図(新屋2015)

の境界については、『図譜』の設定基準にもとづき「荒立段階」を堀之内2式、「高田・矢作段階」を加曾利B1式に位置付けた場合、その中間に位置する「下北原第14号敷石住居段階」が問題となるとし、「高田・矢作段階」における関東地方全域での斉一性の傾向を重視し、下北原14住資料を堀之内2式末に置いた。また、同資料については、注口土器の文様モチーフと描出法に着目し、14住資料では「櫛歯状工具によって自在にモチーフを描く」のに対し、同遺跡第1環礫方形配石遺構出土の注口土器では「沈線が用いられること」「底部付近に横位に区画を施している手法が確立してくる」との差異を指摘している。さらに、14住資料の注口土器のモチーフと描出法は深鉢形土器（第1図8）にも採用されているとしている。この横位沈線による区画は、後年、鈴木正博氏が「単横線区画の多条束線連続入り組み文」（鈴木1995）と呼んだ資料と共通する特徴である。さらに、鈴木氏は『図譜』図版23の注口土器にみられる区画文が「多条束線」によって描かれるものを「多条横線区画の多条束線連続入り組み文」と命名し、加曾利B1式の典型（標識）と捉える。『図譜』図版22の資料については、秋田かな子氏による独自の詳細な分析から堀之内2式の後半に位置付ける考えが提示されている（秋田1994・2015・2016）。これらは、下北原14住資料の評価への接近方法として重要な視点となっており、また各自の思考法方法と手法の差異が明瞭になっており、解消し得ない課題として残されている。

大塚達朗氏は「解題」（大塚2015）のなかで、新屋氏の「組成論的な立場」からの分析姿勢を評価し、異なる器種間の「横断的な連絡具合を分析すること」に力点を移していった新屋氏の思考方法に可能性を見出し、研究者各自の視点（都合）により「一括遺物が使いまわされる事態（自己言及性）」を批判した。大塚は、「“記述の束”」を積み重ねることによって、概念の実体化ははかれないと主張する^{（註2）}。

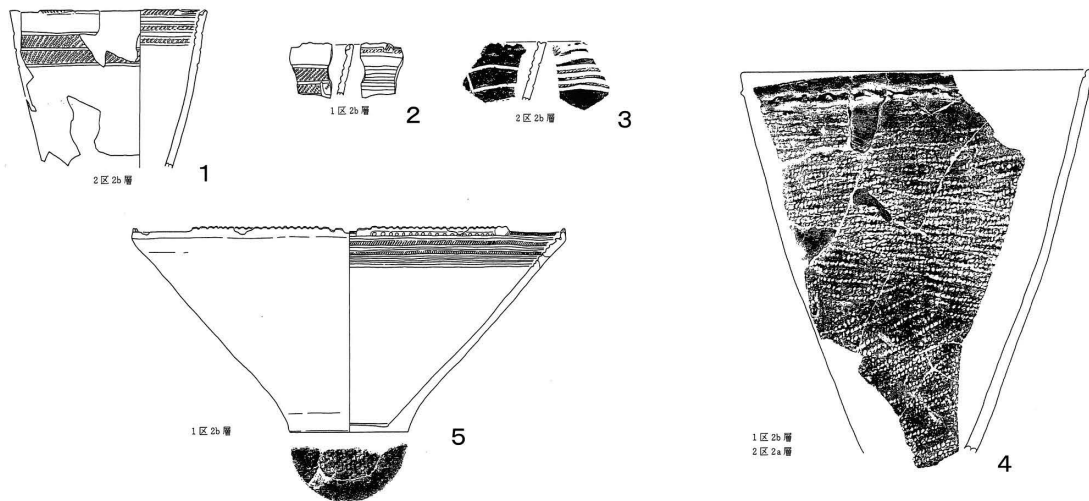
（註）

- (1) 新屋氏の論考は「初出一覧」等によれば、1985年に國學院大學文学部史学科博士課程修士論文として提出されたもので、2節で取り上げた論考が相次いで発表され、加曾利B式編年を中心とした議論が盛んにおこなわれた時期に執筆されたものと考えられる。
- (2) 大塚達朗氏は、前出の論考（大塚1983）について「拙論は、当時筆者の指導のもと寿能泥炭層遺跡出土加曾利B式土器資料整理に参加してくれた新屋氏ら学生諸君にとって参考になればと考え、まとめたものである」（大塚2015）と論文執筆の目的を明らかにしている。また、大塚氏は山内型式論の検討をつうじてその前提となる漸進的変化と異所的布置、そこから招来される細分主義の方針に疑問を呈し、この方針を「私もかつて真に受けたことがあった。」（大塚2000）として、（大塚1983）をあげている。山内型式論という準拠枠における細分主義は縄文土器が一系統であることの別の謂であること（循環論法）を主張し、型式の実在性が保証されない事態が生じるとする。（山田）

■ 東関東

東関東の堀之内式2式土器と加曾利B1式土器の境界に関する論考としては菅谷通保氏が南関東東部後期中葉土器群の様相（菅谷1996）を論述する中で千葉県資料を取り上げている。以下に要約する。

菅谷氏は『図譜』掲載の資料中の「堀之内新型式」と「加曾利B式（古い部分）」を繋ぐ資料として千葉県市川市堀之内貝塚の昭和26年調査資料と埼玉県春日部市神明貝塚出土の土器を挙げている。これらは「口縁下の刻みをもつ隆帯が消失し、胴部紋様帯が多帯化しかつ幅狭となり、内紋の幅が拡大しやはり多帯化して直線的に巡る」点で菅谷氏が堀之内2式新段階とした『図譜』図版58-1・2、東京都日暮里延命院貝塚第6段階貝層、神奈川県下北原遺跡14号敷石住居址よりも後出であるとしており、下北原遺跡14号敷石住居址を堀之内式土器とするとともに加曾利B1式初頭として提示している。またこれらは「口唇部が直線的に外反し「く」の字状の外縁削ぎ落としが見られない」点で『図譜』で「加曾利B式（古い部分）」とされた

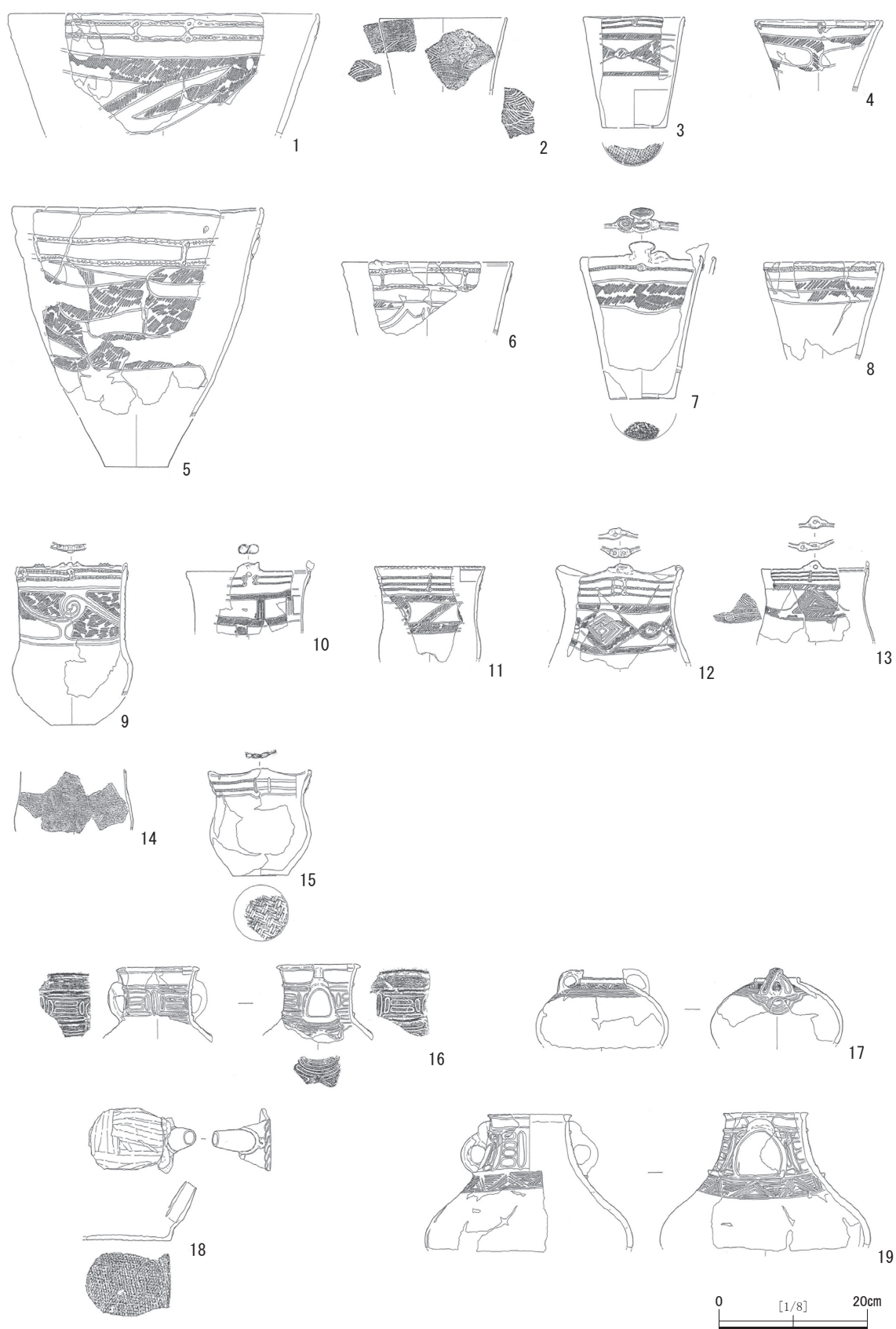


第4図 千葉県市川市堀之内貝塚 昭和26年調査資料

図版23-1の高田貝塚例より古相を示すとしている。これらには胴部紋様中に単位紋は見られないが、千葉県堀之内貝塚の昭和26年調査資料には第4図2・3のような「区切り紋の祖形は既に出現していると考えられ、横帯のみの胴部紋様は同時に存在する」と考えており、この一群の土器を堀之内2式・加曽利B1式のいずれに含めるかについては『図譜』図版23-1の高田貝塚例の「内紋の構成が成立した段階として加曽利B1式初頭に置くのが筆者の考え」として加曽利B式に含めている。ただし、「今のところこの種の土器は西関東寄りの分布の偏りを見せており、北東関東の様相如何によっては、堀之内2式に編入することにやぶさかでない。」と述べ西関東寄りの地域性を示唆しつつ、堀之内2式に編入する可能性についても述べている。

『研究紀要18』(縄文プロジェクト2013)において神奈川県内の堀之内2式の編年を行う中で、あくまで便宜的とした上で堀之内2式と加曽利B1式との境界を「精製土器の口縁部を飾ってきた紐線文と8の字添付文の消失と、横帯文を除いた斜行文・三角文をはじめとする各文様系統の途絶、あるいは無単位横帯文への収斂へ、また堀之内1式から2式へと存続してきた下北原系土器の消失に置く」ものとしている。この基準は堀之内2式の編年に主眼を置いたものであり、加曽利B1式において消失する堀之内式の要素を述べたもので加曽利B1式になって加わる新要素については十分に述べられていないが、紐線文とした口縁下の隆帯の消失を基準の一つとしていることは菅谷氏の論考と共通している。一方で菅谷氏が加曽利B1式初頭の様相とした文様帯の多帯化や、区切り文の成立については述べていないが少なくともこれらを堀之内2式の新段階後半の要素とはしておらず、菅谷氏の論考と概ね変遷観が一致するものと思われる。

また阿部芳郎氏は「堀之内2式土器の構成と地域性—下総台地における堀之内2式土器成立期の様相—」とした論考(阿部1998)の中で堀之内2式を3段階に細分しており、2c式とした終末段階に千葉県船橋市宮本台貝塚第2号住居跡、茨城県土浦市上高津貝塚A地点第XVI2層出土の土器をあてている。宮本台貝塚第2号住居跡からは刻み目を有する横位の隆帯と8の字添付文を有するが口縁部の文様帯が幅狭化した朝顔形の深鉢が出土し、上高津貝塚A地点第XVI2層では同様の土器に内文が認められており、概ね下北原遺跡14号敷石住居址と併行関係にあり、菅谷氏の論考と同様な変遷観をとるものと思われる。(粕谷)



第5図 林中原 I 遺跡SI01出土土器

■北関東

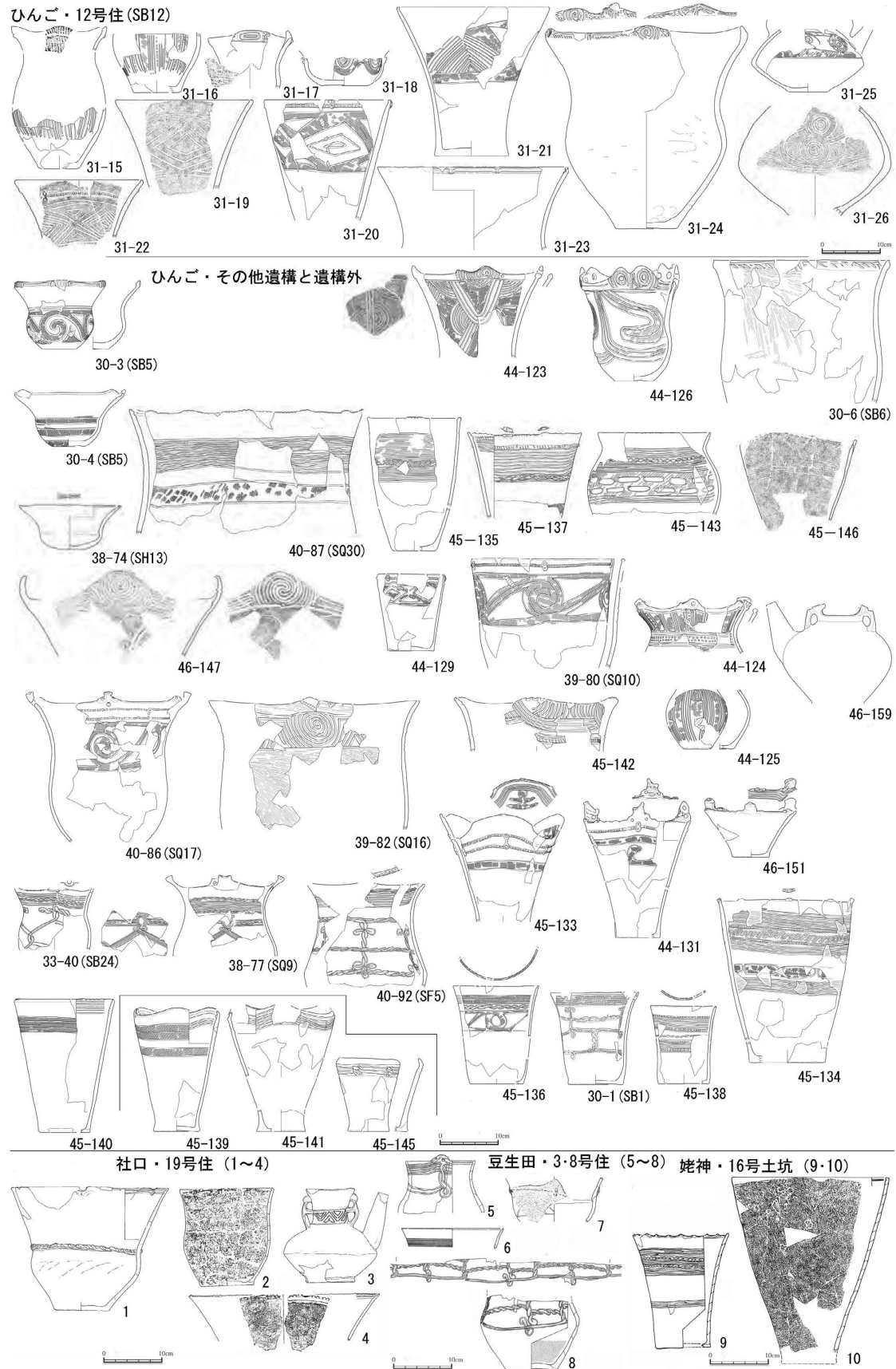
北関東をめぐる研究動向については、1996年から『後期中葉の諸様相』、『後期前半の再検討』および『縄文後期土器の研究と現状』と題して群馬県を会場に検討されてきている（縄文セミナーの会1996・2002・2012）。この中で、秋田かな子氏により提唱された「石神類型」（秋田1996）は、暫定的に長野県小諸市石神遺跡J19号住居址出土資料に基づいて設定されたが、その発生や変遷にはなお不明な点が多いとされていた（秋田1997ほか）。近年、鈴木徳雄氏は吾妻川流域を主に西毛地域から浅間山麓地域において出土例の多いことや、系統的な変遷がたどれること等から同地域での形成を推定している（鈴木2012・2018）。このような見方には、秋田氏も同様な見解を示している。（秋田2016）広域に分布する「石神類型」は関東地方では堀之内2式（後半）との共伴事例も多く、各地域の類型の生成と相互関係に影響を及ぼしていると考えられ、また下北原14住資料中にも関連をうかがわれるものがあり（第1図8、第2図10～18）、同資料の編年的な時期決定のみならず、地域間の同調関係を解明する手掛かりとして重要な問題提起となっている。また、群馬県西部から長野県・新潟県の一部を中心に分布するとされる、仮称「“林中原型”深鉢」が鈴木徳雄氏により設定された（鈴木2012）。「林中原型」は、口部に8字状貼付文を伴う複数条の細隆起線帯をもち、体部は膨張して無紋であり、底部は突出しない。網代痕を持つ平底を呈するという特徴を有する。底部の立ち上がりについては、標準的な朝顔形深鉢とは異なっており、「小仙塚類型」につながる深鉢の体下部の形態との連続性が推定されている（鈴木 前出）。

下北原14住資料中、第1図9について秋田氏は「“石神類型”自体」と評価し、横帯文の施文される朝顔形深鉢を主体とする同資料に“石神類型”そのものが伴う事例と捉えている。さらに、8については“石神類型”の指標とした多条沈線が朝顔形深鉢に採用された資料と考えている（秋田1997）。秋田氏の指摘は中部地方との注口土器の共有を含め、“石神類型”の影響が様々な形態をとることを示した。第5図は群馬県長野原町に位置する林中原Ⅰ遺跡で検出されたSI01出土土器の一部である。かながわ編年（縄文時代プロジェクト2013）では堀之内2式中段階から新段階に位置付けられると考えられる。1～8は、朝顔形深鉢で胴部に施文されるモチーフは編年的な位置を示すものと考えられる。底部は張り出さず、口縁部の外傾は弱い個体が多い。これは、中部の項での指摘と共通する。9～15は“林中原型”深鉢である。15は、下北原14住資料（第1図10）とは、緩い波状を呈する口縁部形状、頸部がくびれ、この上部に刻目の加えられた横位の隆帯が貼り付けられる点、胴部は膨らむ器形を呈する等、類似点が多いが、第1図10は鉢形に近い器形をとり、また口縁部内面に刻目がみられるなど内面文様が発達しており、相違も指摘される。16～19は注口土器で有頸（16・19）と無首（17）のものがある。18には石神文様が施文されている。第1図10～18と共通する。（小島）

■中部

堀之内2式新段階を中心に、中部地方について長野県と山梨県に分けて確認するが、ここではとくに「石神類型」に注目する。

まず、長野県について綿田弘実氏により提唱された「ひんご2式」を通してその特徴を抽出する。綿田氏は近年、長野県下水内郡栄村豊栄に所在する、ひんご遺跡の成果にもとづき、堀之内1式併行の土器を「ひんご1式」、同2式併行を「ひんご2式」と命名し、その内容を示した（平林ほか2018、鈴木2018）。このうち、ひんご2式はSB12出土土器にもとづき設定されたものである。SB12出土土器は、神奈川編年の堀之内2式中段階に位置づけられる一群である（縄文プロジェクト2013）。綿田氏によると、朝顔形深鉢に近似するもの



第6図 長野・山梨県の関連土器(上段：長野県ひんご遺跡、下段：山梨県関連資料)

の口縁部の外傾が乏しい直胴形深鉢が多く、菱形文・三角文が描かれる（第6図31-19～22）。これに栗林類型（31-17・18・23・24）や南三十稲場2式の元屋敷類型が共伴する。粗製土器に無紋土器が多くを占めるのは長野県側の影響とされる。ひんご遺跡では、堀之内2式土器を第6類とする。その新段階とされる土器には、宝珠状突起や内面文の発達が認められ（44-131・45-133・46-151）、関東地方にみられる底部が外側に張り出す器形（31-21）とともに、長野県に特徴的な湾曲のないバケツ状器形（31-20・39-80・44-129・44-131）が多い（直胴形深鉢）。口縁部文様帯は関東に共通するものの、胴下半部が丸みをもつ器形「林中原型」も多い（40-86）。45-133は波状口縁内面に沈線帯と雲形意匠を描き、6類の新段階に位置づけられる。45-140には口縁部に刻み隆帯がなく幅狭い4段の縄文帯が巡り、内面に沈線帯がある。45-146は、緩い波状口縁で、2段の縄文帯が巡る。この2点は6類終末段階とされる。第7類の石神類型は、堀之内2式後半に併行し、浅間山麓の群馬県側、長野県側から千曲川流域に分布の中心があるとされる。7類には、深鉢として、口縁部が外反し胴下半部が丸みをもつもの（A器形、33-40・38-77・40-92・45-143）と、バケツ形を呈するもの（B器形、30-1・45-134～138）の2種がある。A器形が第6類の林中原型深鉢、B器形が直胴形深鉢を継承する。これらは、口縁部に多条の細隆線、集合沈線による横線帯、胴部に長方形、三角状、環状の意匠を連鎖状沈線で描く。口縁部に集合沈線を施す厚手・大形土器も少なくない（平林ほか2018、p. 71）。45-134・136・137・143は、刻み隆線、文様に縄文を施すなど、6類の特徴を残す古手の個体である。横線帯と連鎖状沈線は、45-134・135に櫛歯状工具、その他に単沈線で施文される。45-134・138の横線帯と並走する沈線間列点文は、6類の刻み隆線を転写、移動した文様とされる（平林ほか2018、p. 86）。

これらをまとめた総括にてつぎのような特徴が示される。堀之内2式新段階に併行するものとして、栗林類型が浅鉢に近い形態をとり、無文が多い（30-4・38-74）。深鉢は文様体幅が狭まり、口縁部の3単位突起と内面文様が発達する（44-131・45-133・140）。堀之内2式中段後半に祖型が現れた石神類型（第7類）は、新段階に発達し、堀之内2式的な土器（第6類）を上回って有文土器の主流を占める。この類型には、林中原型深鉢の器形を受け継ぐA器形と、直胴形深鉢からのB器形がある。薄手で精製度が高い小形土器が主流であるが、本遺跡には中・大形深鉢（40-87）もある。この時期には、内面文様が発達した浅鉢と、石神類型と共通の文様を描く注口土器と蓋形土器が多出する。従来石神類型は、浅間山麓が分布の中核地域と考えられてきたが、そのなかでも法量・器種が多様で、有文土器に占める割合が高いのが本遺跡の特徴とされる（平林ほか2018、p. 130）。

山梨県に目を向けると、三田村美彦氏による『山梨県史』で示された堀之内2式新段階は、朝顔形深鉢の体部文様が幅狭となり横帯化が徹底され、口縁部内面に沈線をめぐらせるもので、長野県や神奈川県に共通した様相をもつ（三田村1999、縄文時代プロジェクト2013）。『山梨県史』にて堀之内2式新段階とされた遺構から出土した深鉢には、内文をもつものがあり（第6図1・4・10）、姥神16号土坑（9）のように多条細沈線が施されるものに、姥神16号土坑（10）で無文化、大形化するものが共伴する。また、無文化の傾向は、1、2、4にも認められる。5、6、8、9が石神類型にあたる。注口土器では、社口19号住（3）にみられるように頸部が発達するものと、頸部の発達が認められないものがあり、後者が加曽利B1式期につづく。

上記の分析および秋田かな子氏などが示す石神類型は、いずれも堀之内2式後半段階に位置づけられる（秋田1997、三田村1999、平林ほか2018、鈴木2018）。なかでも堀之内2式新段階に共伴する石神類型の存在（第1図9）は、下北原遺跡14号住居址から出土する石神類型を含む土器の位置を示唆するものといえよう。

（阿部）

■南東北

南東北における堀之内式土器から加曽利B式土器への変遷については、福島県いわき市愛谷遺跡の出土資料を使って大枠の理解を普及させた馬目順一氏の報告が知られている（馬目1982）。馬目氏は、南東北（特に福島県域）における縄文後期前半の土器編年として、在地の土器型式である綱取Ⅰ式（後期初頭：称名寺式併行）→綱取Ⅱ式（後期前葉：堀之内Ⅰ式併行）→堀之内Ⅱ式（後期前葉）→加曽利B式（後期中葉）という大枠の変遷を示して、いわき市愛谷遺跡の出土資料からも具体的変遷が追えることを図示した（第7図）。特に、堀之内Ⅱ式土器から加曽利BⅠ式土器への変遷に関しては、南東北では独自型式の設定に至っていないこと、関東地方との関連性の強さを強調している。堀之内Ⅱ式段階では、薄手小型の土器が多くなり、胴部下半を無文帯とし、胴部上半には沈線を多く加える壺形土器、沈線と沈線の間に小刺突を加える土器、磨消縄文が大雑把に付けられる土器が出現してくるという。やがて口縁部に1条から2条の突帯を巡らし、外面は無文、内面に多条沈線を配したり、磨消縄文が帯状になって弧線で区切られるという変化は、大枠では関東地方とも共通する事象である。と同時に、縄文を多用せず、横位連繫の入組文を配するなど北からの影響（仙台湾周辺か北東北からか）と思われる異系統の土器も混在しており、その独自性が指摘されている。加曽利BⅠ式段階においても、帯状の磨消縄文を基調とする傾向は同様だが、磨消縄文に大きな刺突文を加える土器は該期の関東地方には見られない土器であり、これも北からの影響と考えられている。器形に地域性が強く出るという一般的な指摘もなされている。

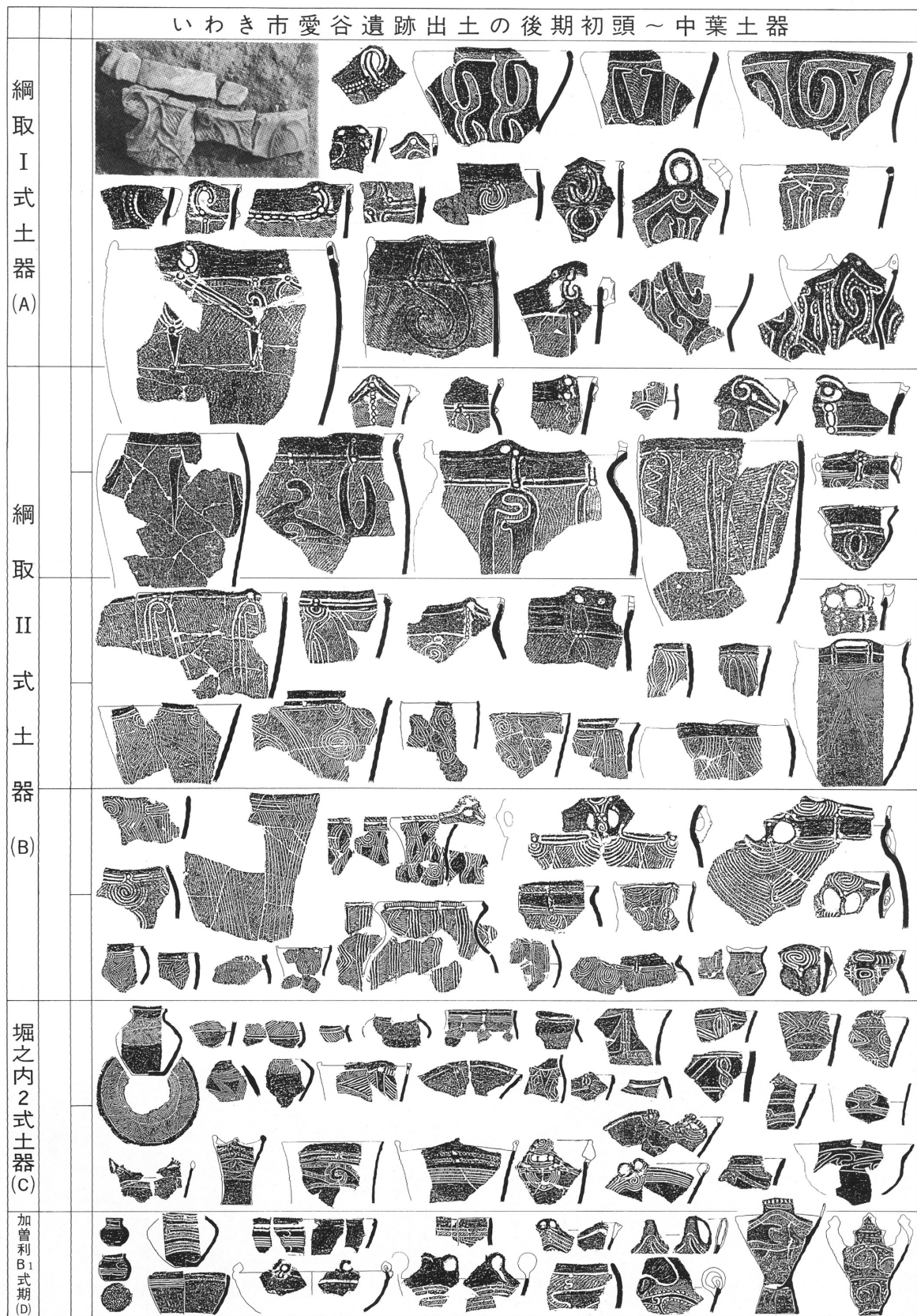
南東北の独自性、独自型式の設定については、古くから鈴木克彦氏（鈴木2005）によって指摘され続けてきているが、あまり広く受け入れられるところまでは至っていない。豊富な資料に恵まれたいわき市番匠地遺跡の出土資料から番匠地式の提唱もなされているようであるが、独自型式はいまだ浸透していないようである。近年でも阿部芳郎氏（阿部2020）によって南東北の独自性と関東地方への影響について論じられており、福島県郡山市町B遺跡出土資料を主体に、堀之内Ⅱ式土器から加曽利BⅠ式土器への変遷の独自性（地域性）を明らかにしている。堀之内Ⅱ式土器の特徴の一つでもある口縁部の貼付文についても、細い粘土紐上に縦方向の刻みが連続的に施されるものが多いが、徐々に横方向の刻みが増加し、押捺も米粒状の小さな押捺に変化していくという。口縁部の断面形態も「く」の字状に内折するものは極めて少ない。また、口縁部突起があまり発達せず、突起直下に単位文が配置される点や胴部文様における横帯文の展開も特徴的とされる。口縁部に複数の沈線で文様帯を区画する手法や口縁部直下の単位文が、関東地方における加曽利B式の成立に影響を与えた可能性を指摘している。南東北における堀之内Ⅱ式土器から加曽利B式土器への変遷については、「一部で関東地方と共通する部分を持ちながらも、胴部紋様の変遷も含めて独自の変遷を遂げている」ことが強調されるのである。阿部氏も将来、独自型式を設定すべきとの見通しを示している。

さて、南東北の資料をもって、下北原遺跡第14号敷石住居址出土資料との直接的関連を指摘することは難しいが、阿部氏が強調するように、地域間における相互関係を把握するという観点から検討を継続すれば、一様ではない堀之内Ⅱ式土器から加曽利BⅠ式土器への変遷の実態を把握することができるものと考えられる。

（野坂）

■北海道

北海道において縄文時代後期の土器は、1930（昭和5）年前後に「北海道薄手縄紋土器群」のうちの「前北式」（今日の続縄文時代前半の土器を包括していた型式）の一部と認識されていたが、その後ほどなく縄文時代後期の土器を示す名称として野幌式^{のっぼろ}が提唱（河野・名取1938）された。「関東地方で加曽利B式と呼ば



第7図 いわき市愛谷遺跡出土の縄文後期初頭～中葉の土器（馬目1982）

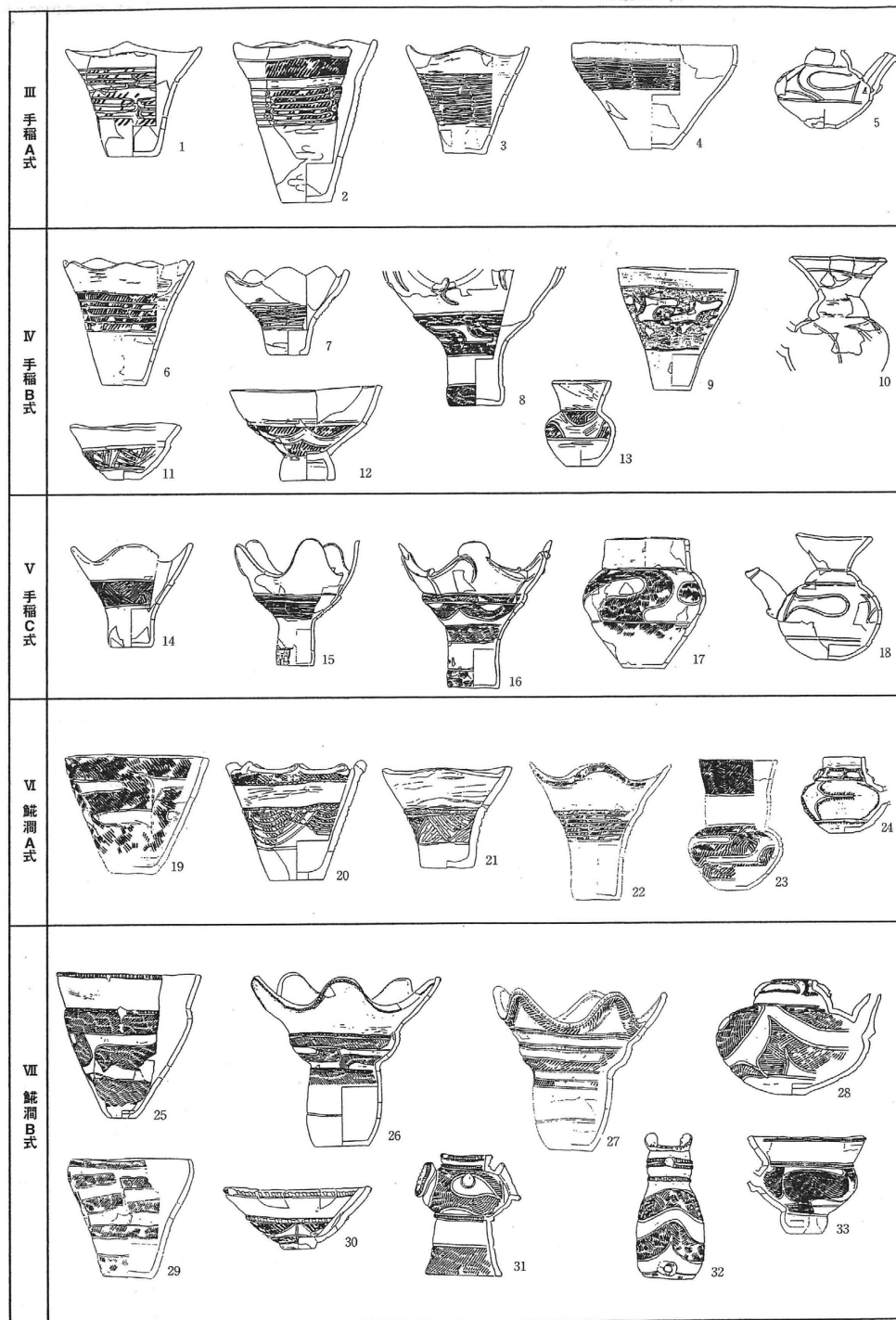
れてゐるものに形式上（原文ママ）類似してゐる土器と、其の祖形を含み、奥羽地方でも亀ヶ岡式より古い所に此の類似形が見られてゐる」（名取1939）との記述があり、当初から加曾利B式との影響関係に着目されていたことが窺い知れる。戦後、道内各地で行われるようになった発掘調査による資料の蓄積を受け、徐々にではあるが型式の細分化が進められた。今日、北海道における加曾利B式併行期の土器としては、手稲式（・ふなどまり船泊上層式）とほっけま鯔潤式（・エリモB式）が挙げられる。前者を加曾利B1式併行、後者を加曾利B2式・B3式併行とする認識が一般的である。いずれも道央圏を中心に分布し、道南地方でも一定数が出土する。一方、道東地方や道北地方では、まとまって出土した遺跡自体が少ない上、道東地方においては手稲式が見られないなど、型式で分布傾向に違いが表れてもいる。

手稲式は札幌市手稲遺跡（大場・石川1956）で出土した資料の再検討を通じ、吉崎昌一氏が提唱した（吉崎1965）。平口縁と波状口縁があり、文様は斜行縄文のみを施すものと、縄文地の上に平行沈線を数条巡らせ、これを蛇行する弧線文が縦に貫くものがある。後者では、胴部上半に文様帯を構成し、口縁部と胴下半部は広く無文であるものが多い。また、丸みを帯びた波状口縁が大ぶりに発達したものもある。深鉢が多いが、浅鉢、壺、注口土器等も一定数があり、オロシガネ状土製品という特長的な遺物がともなうことも知られている。

船泊上層式は礼文島船泊第四遺跡（児玉・大場1952）出土土器の主体をなす土器群（Ⅰ類の一部およびⅡ～Ⅵ類）を一型式としたものである。深鉢形を主体とし、地文の斜行縄文の上に引かれた横走する平行沈線文、これを連結する縦の短い直線の沈線、三角形を連続的に構成する鋸歯状沈線文を特徴とする土器である。手稲式では胴部上半に文様帯が横環するが、船泊上層式では口縁部と胴部に文様帯を巡らせて、頸部を無文帯が横環する。船泊上層式に典型的な文様帯の配置は、もう一段階古い、入江式や大津式（大津Ⅶ群）等と共通するものである。こうした諸特徴から、吉崎昌一氏は船泊上層式を手稲式に先行する土器型式として位置づけた（吉崎1965）。

ほっけま鯔潤式は1931（昭和6）年、松下亘氏が発掘した小樽市鯔潤遺跡の一括資料を元に設定された（名取・松下1969）。すでに設定されていたエリモB式（大場・扇谷1953）に類似しているものの、エリモB式に施文されている口縁部の特徴的な突瘤文が見られなかったことから、エリモB式の先行型式の可能性が目されたものである。鯔潤遺跡の出土資料が断片的であったことから設定当初は全体像が定かでなかったが、その後の発掘によってまとまった数の復元個体が得られ、具体的な内容が明らかになってきた。地文に羽状縄文を施すことと、口縁部や頸部のくびれ部分に上下を太めの沈線で区切った中に縦位の刻み列を充填的に施す点で、手稲式とは区分されている。沈線内を充填する羽状縄文については沈線の区画に関わらず横走する。一方、鯔潤式に後続する可能性が指摘されているエリモB式では、区画する沈線の向きに沿って、多方向に羽状縄文が施文される。異形台付土器、釣手付土器など器種が手稲式以上に多彩化することも鯔潤式の大きな特徴である。

手稲式・鯔潤式とも器形・文様は加曾利B式に類似するが、精製土器・粗製土器の違いは加曾利B式ほど明瞭ではない。手稲式において特徴的な平行沈線と縦位の沈線は加曾利B式とおおむね共通するが、鯔潤式において顕在化する縄文帯の文様や配置は加曾利B式と異なる印象がある。また、加曾利B式において顕著な底面の網代痕、平行沈線や貼付による内面施文が総じて希薄であることも北海道の特徴として挙げられよう。堀之内式併行期とみられるわきもと涌元式においては底面に網代痕と木葉痕が一定数認められるが、その段階においてさえも、堀之内式や加曾利B式に比べるならば決して多いとは言い難い。これはおそらくは堀之内式



第8図 小樽市忍路土場遺跡出土の加曽利B式土器併行土器（鈴木2008）

の影響があまり及んでいないことによる地域的な傾向であろう。

北海道は土壌の発達が遅く、総じて包含層が薄い。何らかの好条件がなければ、出土遺物の新旧が層位的に表れることが少ない。手稲式（船泊上層式）・鮭潤式（・エリモB式）に関しても同様に、型式学的な諸特徴の変遷を、まずは北東北や東日本全体の類例と突き合わせることで、新旧を推考してきた経緯がある。とりわけ手稲式と鮭潤式は同一遺跡同一層から混在して出土することが多く、胎土、焼成も酷似することか

ら、かつては両者を分けずに扱われることもあった。しかし、小樽市^{おしよろどば}忍路土場遺跡（道埋文1989）では河川堆積によって複数の包含層が形成されており、後期初頭の余市式から船泊上層式、手稲式、鯰澗式、その後の堂林式までが初めて層位的に明らかとなった。そして、加曾利B式併行の手稲式については三段階、鯰澗式については二段階に細分案が示された（第8図）。

船泊上層式については、手稲式より一段古い型式とした吉崎説（吉崎1965）に対して、手稲式と同時期の土器型式であるとする見解もあった（鷹野1978）。船泊上層式はそれ以前の入江式など北海道的な土器の系譜を引きつつ加曾利B式の影響が現れたもので、東北地方に展開していた十腰内Ⅱ群や宮戸Ⅱa式と対比できる手稲式はより本州的な土器であるとして、両者の型式的な相違を時間差ではなく系統の違いに求めたものである。しかし、忍路土場遺跡における層位的発掘の成果を受けて、吉崎説の正しさが裏付けられた形となった。「船泊上層式がウサクマイC式に後続し、手稲式に先行する土器群であることは前後の土器や層位によって確認された。（中略）今後はもう一段古いものとし、口縁部及び口頸部が完全に無文帯となる時期をもって手稲式とした方が良いのかも知れない。本報告においては手稲式の最も古い段階としておく」（道埋文1989）と記載されている。平行沈線文が複数巡るモチーフから、船泊上層式も加曾利B1式の影響を受けていることは間違いないであろう。ただし、現状では、「手稲式の最も古い段階」というより、吉崎説のように一段古い土器型式とみなす見解が広く定着している観がある。

エリモB式に関しては、鯰澗式に後続するもので、突瘤文が主体的に施される堂林式との間を埋める型式とする見解（鷹野1981）がある一方、鯰澗式とエリモB式を不可分とする見解（森田1981）もあり、この点については現在もなお定まっていない。（影浦）

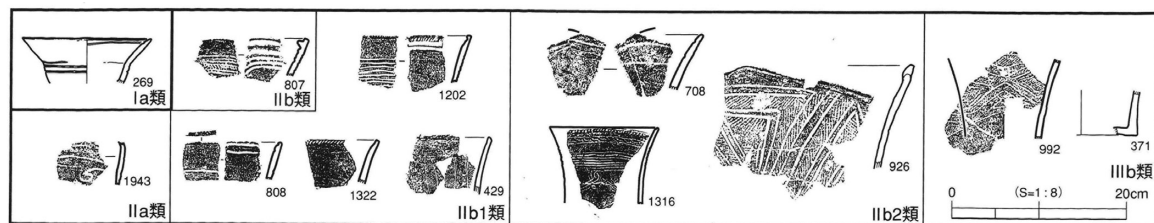
■北陸

北陸地方（新潟県）における堀之内2式末から加曾利B1式並行併行期の土器編年について、品田高志氏による十三本塚北遺跡の報告での分析（品田2001、以下「報告」）を中心として概観する。報告書では、後期土器を系統からA群からL群の12群に大分類し、AからD群土器群の変遷から第Ⅱ～Ⅳ期の時期大別を設定した（第1表）。第Ⅳ期はD群の「多条細沈線文系土器」の時期でありa期とb期に細分された。併行関係について、第Ⅳa期は堀之内1式末から堀之内2式のある段階までを想定し、第Ⅳ期の後半b期は「堀之内2式後半頃に対比させつつも、下限は加曾利B1式まで下る可能性」が示唆されている。第Ⅳb期の土器群については、多条細沈線文が「さらに細線化し、口縁部には平行細沈線文が多帯化して施される段階」を想定している。第1表では、「+「元屋敷20I・21I」」を充当している。ここでは、堀之内2式土器のほか加曾利B1式の可能性のあるもの；「K群土器：堀之内2式系土器」（第9図）についてみていく。K群土器は、層位的には廃棄場の「上層位となる1～2層」でD群土器と同じ傾向を示しているとされている。同群土器は器形によって、鉢形土器（第Ⅰ類）、深鉢形土器（第Ⅱ類）に大別され、胴部破片は第Ⅲ類として一括されたが、報告書掲載の実測図からは、器形は深鉢形となる土器が多いものと判断される。さらに各類は器形と施文される文様により細分される。

文様は内・外面、口唇部に加えられる。口唇部内面に1～2条の沈線を巡らすもの（Ⅰa類、Ⅱb1類、Ⅱb2類、）と、より多条化したもの（「報告」では「内面文が発達したもの」Ⅰb類）がある。また口唇端部に刻目が加えられるものがある。外面の文様は、第Ⅰ類鉢形土器では、2～3条の平行沈線をめぐらせるもの（a類）、無文、細い沈線文、「斜位短線帯」を伴う構成をとるもの（b類）に分類されている。第Ⅱ類深鉢形土器、第Ⅲ類では、「胴部上半に縦長の対弧文を横位に連続的に描く磨消縄文」（ⅡB1類）、「細沈線文帯」、さら

第1表 十三本塚北遺跡土器群変遷試案（品田2001）

時 期 区 分	越後の土器型式名等	標 識 的 資 料	関 東	東 北 南 部	北 陸
十三本塚北中期段階Ⅰ	a	中期前葉段階			新崎・上山田
	b	中期中葉～後半段階	—		
	c	中期末葉段階	加曽利EⅣ	大木10	
十三本塚北後期下層段階Ⅱ	a	1 三十稲場式成立期	万條寺林SK183	称名寺1	網取Ⅰ古段階
		2 三十稲場式古段階	原J13p7		
	b	三十稲場式古段階	城之腰R24p30	称名寺2	網取Ⅰ新段階
			+		
	c	1 三十稲場式新段階	馬下稲場遺跡	堀之内Ⅰ古段階	
		2 三十稲場式新段階	岩野原10ML1 十三本塚北SKp1734		
十三本塚北後期中層段階Ⅲ	a	古 南三十稲場式古段階	+(向原IID4p3)	堀之内Ⅰ中段階	網取Ⅱ古段階
		新 南三十稲場式古段階	向原IIC1p1 城之腰O32p140		
	b	南三十稲場式古段階	岩野原8PL69(一部)	堀之内Ⅰ新段階	
十三本塚北後期上層段階Ⅳ	a	南三十稲場式新段階	アチャ平下段(一部) 十三本塚北SK932	堀之内Ⅰ末段階～2	網取Ⅱ新段階
	b	南三十稲場式新段階	+(元屋敷20I・21I)	堀之内Ⅱ～加曽利BⅠ	網取Ⅱ新段階 ～網取直後
+	V			加曽利BⅠ	



第9図 K群土器の器形部分類図（品田2001）

に入り組み文を伴うもの（ⅡBⅠ類、ⅡbⅡ類、Ⅲa類、「石神類型」）、沈線区画内に条線文、縄文を施すもの（ⅡBⅠ類、Ⅲ類a類）、三角形を重ねた磨消縄文の施文されるもの（ⅡbⅡ類、Ⅲb類）、無文（ⅡbⅡ類）、平行する沈線を数条巡らせるもの（ⅡbⅡ類）がある。「報告」では触れられていないが、（Ⅱa類、1943）は蛇行懸垂文の一部とこれに接続する渦巻文から系譜がたどれるものと考えられる。

「K群土器」について文様を中心に注目される特徴をあげると、内面文様の発達度合い、口唇端部の刻目の有無、外面の各文様モチーフ（縦長の対弧文、平行する横位沈線を巡らす、「斜位短線帯」、「細線文帯」、三角形の磨消縄文）がある。縦長の対弧文および（Ⅱa類、1943）は、C群「十三本塚北類型」（鈴木2018）第Ⅳa期からの系譜をたどれる。また、横位に連続する三角形の磨消縄文の施文されるもの（926・992）については、神奈川編年（縄文プロジェクト2013）では「古段階」に位置付けられ、堀之内Ⅱ式末までは時期的に隔たりがある。口縁部に平行沈線を巡らす土器群、多条の細沈線を施す土器群、「石神類型」との関連が推定される土器群（1316）が分析対象にされ一群の土器群として捉えられたことは、「報告」のなかで第Ⅳb期の段階設定がなされたことを踏まえ、「南三十稲場式新段階」と堀之内Ⅱ式から加曽利BⅠ式との併行関係の分析をすすめるうえで重要な視点を提示したものと評価できる。「報告」では第Ⅳb期の土器群の内容は、

出土資料の少なさから明示されなかったが、その後、南三十稲場式最終段階（金子2001）、アチヤ平5期（金内2002）として豊富な資料として具体的に示された^{（註1）}。これらの論考では、基本的には南三十稲場式（在地系土器）深鉢を中心とした系統変遷により段階を設定し、「明確な共伴関係」（金内2002）の確認にはいたっていないことから、保留しつつも堀之内2式から加曽利B1式の古い段階と並行関係を推定するという方針をとる。また、在地系とされる「南三十稲場式最新段階」を含む金子のA群土器（金子2012）は、阿賀野川以北に多く見られることが指摘されている。

2002年に開催された第15回縄文セミナーでは、鈴木正博氏により口縁部直下に多条の沈線を回す「奥三面14類」（金子2002；「南三十稲場（最新）」）について言及があり、「特に、横帯の磨消縄文の前後に多条の横線文をやるとするのは、この私どもの加曽利B1a式の、あるいはその直前の所にも十分に共通すべきもの」との見解が示された。また、その成立を求める必要があるとの問題を提起し、富山県方面の資料に注目した。さらに、このような特徴は随所に見られるとし、堀之内2式と加曽利B1式の境界問題の議論について自身の視座を明確にした。

「口縁部直下に多条の沈線を回す」土器群について、秋田かな子は、「横線帯」と呼称し堀之内2式終末段階の「石神類型」との交渉の中で、堀之内2式の刻みを有する隆帯から変化したものではないかとする。（秋田1996）下北原遺跡第14号敷石住居址出土資料では第1図9および第1図8、第2図12、13、14等が検討対象となる。

鈴木徳雄氏は、南三十稲場式新段階（堀之内2式並行の新しい部分）における口辺部に横位の集合沈線（「口辺部横線帯」）が充填される“元屋敷類型”から遷移した新しい“類型”を仮称“長割類型”とし、この編年的な位置付けについて、長割遺跡での共伴関係から「現状では概ね堀之内2式に並行するものであると捉えることができる。」として、加曽利B1式まで下ることには否定的な見解を示した。長割類型の特徴である「口辺部横線帯」の形成については、「石神類型」との交渉（「石神文様」に先行する“初期石神文様”の影響）による元屋敷類型の在地的な自立的変化であり、「加曽利B1式期への変化の前哨」とされた。（鈴木2018）

これらの論考では、堀之内2式末から加曽利B1式初頭の変遷を捉えるにあたって、口縁部に施される「横線帯」の発生と展開（南三十稲場式の最新段階）、および「石神類型」の変遷と編年的位置付けが、下北原遺跡14住資料の理解に関連しては中心的な課題となっている。

（註）

- （1）金子優子氏は、元屋敷遺跡出土資料から「ひとつの類型」a類を設定し、同遺跡包含層出土資料をこれに充てている。（金子2001）口縁部に横位の多条細沈線文を施すこの類型は、十三本塚北遺跡K群II B1類の一部と同様である。なお、（金子2002）では「当日資料1 14類」として提示された。（山田）

■東海

ここでは東海地方について概観する。尾張・三河・遠江地方が該当する。良好な資料が出土した遺跡は、東海地方を代表する集落である静岡県浜松市所在の蜷塚遺跡、愛知県西尾市所在の八王子貝塚、愛知県豊田市所在の今朝平遺跡などがある。

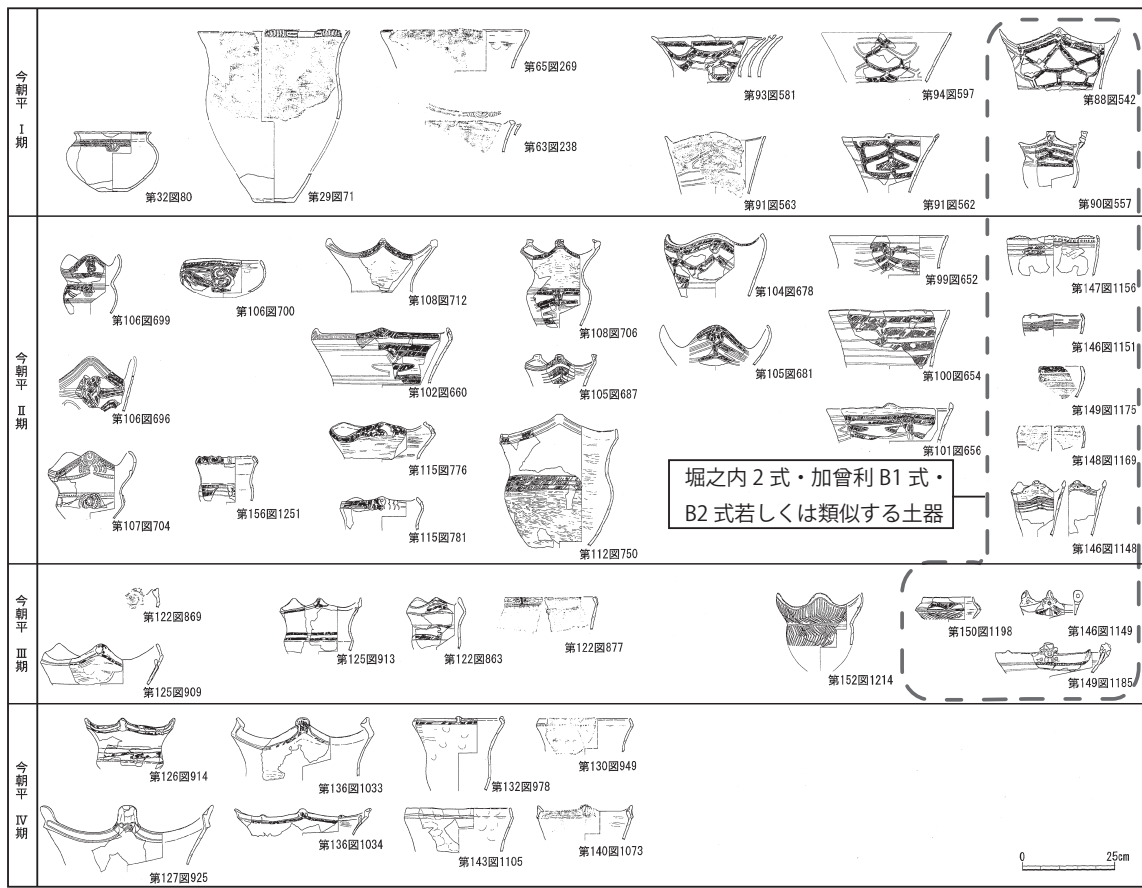
蜷塚遺跡は古くからその存在は知られ、麻生優氏（麻生1962）・久永春男氏（久永1969）・増子康眞氏（増子1994）・向坂鋼二氏（向坂1970・1971）など先学の研究が蓄積され、器形や文様などから近畿地方の一乗寺K1式・元住吉山I式土器との対応が捉えられている。分布は「静岡県西部から愛知県にかけての東海地方に分布しているが、客体として含まれる事例は、東は伊豆半島、北は八ヶ岳南麓から伊那谷にかけての長

野県南部、岐阜県山間部あたりまで広がっている。」(向坂1994)と把握され、後期土器については「近畿地方まで分布が認められ、一乗寺K1式・元住吉山I式との弁別、ひいては分布圏の確定がむずかしい。」(向坂1994)との様相が示されている。蜆塚貝塚第2トレンチ下層出土土器に伴って加曽利B2式土器が出土しており、時間軸を検討する上で重要な資料である。これら後期の土器群は「後期中葉に地域色の強い型式が東海地方に成立したことを示す点で重要な意味を持っているが、不明な点も多く、その細分や他地域との関係の問題は今後の研究課題である」(鵜飼1994)と指摘されている。

八王子貝塚は明治時代からその存在は知られ、調査・研究の対象となっており、明治34年に発掘され、その報告が東京人類学会雑誌に掲載され(犬塚1901)、以降(小栗1973)など多数の調査・報告があり東海地方で著名な貝塚となっている。八王子式土器は標識土器とされ(山内1939)、その具体的な特徴は「平縁の深鉢形土器は口縁の細紐状隆線が省略され、胴部の磨消縄文帯の絡げ縄構図は斉一性を失う。帯縄文を数段めぐらすだけのものが一般的となる。波状口縁の深鉢形土器においては『く』の字形に屈折した口辺部の文様が簡単になるが、胴部文様帯には同心円またはV字形を核とした絡げ縄構図が採用され、盛行する。」(久永1969)や比較的多くの資料が掲載されている『西尾市史』Iなどを主体にその内容が検討されてきた。近年には八王子貝塚の発掘調査報告書(松井2000・2001・2002・2003・2005)が刊行され、その詳細に基づいて、(増子2010)・(百瀬2013)・(東海縄文研究会2015)・(森本2019)などの研究により八王子式のさらなる解明が行われている。今朝平遺跡は1978年に発掘調査が行われ、縄文後期から晩期の遺構や遺物が豊富に認められ、配石遺構や土製品などの特徴を有することが明らかとなっている。2019年には報告書(長田ほか2019)が刊行され、遺跡の実像が解明されている。豊富な出土量を有する土器の主体は後期前葉から中葉で「今朝平I期：堀之内2式・北白川上層2期・下内田式、今朝平II期：加曽利B1式・北白川上3期・八王子式、今朝平III期：加曽利B2式・一乗寺K式・西北出式、今朝平IV期：加曽利B3式・元住吉山I式・蜆塚KII式・長谷式」(森本2019)と各段階に区分され、周辺地域との対比関係も併せて具体的に把握されている。また「後期中葉八王子式に含まれる土器群が豊富であり、近年指摘される八王子式の古段階か特新段階への変遷を示す資料として評価されよう。特に八王子式の特徴の一つでもある三単位波状口縁深鉢のうち、頸部に無文帯を有する一群が一定量観られる点は、八王子貝塚における型式変遷を補う土器群として注意されよう。またこれらに伴うであろう加曽利B式土器など異型式土器が一定量存在する点も、後期中葉土器群の豊富さとして評価できよう。」(長田2019)と東海地方のみならず編年の広域的な関係をも把握しうる重要な成果であることが指摘されている。

従来から斉一性の強い土器と言われている加曽利B1式期土器を捉える上で、東海地方を概観した。八王子式成立過程の様相をみると西日本系土器や堀之内2式土器の器形や文様要素が融合し東海地方の土器として成立しているようであるが、その後も断片的に他地域の土器が移入している。堀之内2式や加曽利B1式またはそれらに後続する土器が客体的に出土しており、他地域から波動的に移入していると考えられ、東海地方と関東地方の時間軸を繋ぐ上での手がかりとなるものと考えられる。今後これら東海地方はもとより、周辺地域の土器分布圏や密度などの詳細も含めて事例の増加と相互関係の把握や広域編年の確立に努めていく必要がある。

(天野)



第10図 今朝平遺跡の土器変遷 S=1/20 (今朝平遺跡土器変遷図1・2 (長田2019) に加筆・改変)

4. おわりに

各地域における後期前葉から中葉にかけての土器編年研究について概観した。

かながわ編年 (縄文時代プロジェクト 2013) も、これに依拠している石井寛氏の編年研究 (石井1984) については、「今なお堀之内2式土器細分研究の一つの到達点を示している。」(加納2008) と評させているが、他の論考ともども堀之内2式と加曾利B1式の境界問題は解決されなかった。もとより本稿においても未解明なままであるが、連続し均一で切れ目が見出し難い土器型式変遷観を前提とした議論の進め方は再検討の余地があるとも考えられる。 (山田)

(引用・参考文献)

- 秋田かな子 1994 「加曾利B1式注口土器の成立 (予察) —王子ノ台遺跡出土の注口土器から—」『東海大学校地内遺跡調査団報告4』東海大学校地内遺跡調査委員会・東海大学校地内遺跡調査団
- 秋田かな子 1996 「南関東西部の加曾利B式土器—構造の理解に向けて—」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 秋田かな子 1997 「“石神類型” 覚え書き」『東海大学校地内遺跡調査団報告7』東海大学校地内遺跡調査委員会・東海大学校地内遺跡調査団

縄文時代研究プロジェクトチーム

- 秋田かな子 2016「縄文時代後期注口土器の変化と画期－南関東地方にみる諸相から－」『東海史学』第50号 東海大学史学会
- 安達厚三 1995「八王子貝塚」『日本古代遺跡辞典』大塚初重・桜井清彦・鈴木公雄編 吉川弘文館
- 阿部芳郎 1998「堀之内2式土器の構成と地域性－下総台地における堀之内2式土器成立期の様相－」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会
- 阿部芳郎 2020「加曽利B1式土器の成立過程と地域間関係－東北地方南部・北陸地域の型式間関係を中心に－」『考古学刊』第16号 明治大学文学部考古学研究室
- 新屋雅明 2015「第1章 加曽利B式土器の再検討」『縄文時代後・晩期土器編年の研究－加曽利B式～安行式土器群の変遷－』六一書房
- 石井 寛 1984「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究集録』5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 大塚又兵 1901「三河國幡豆郡西の町貝塚に就き」『東京人類學會雜誌』第16巻第179号 東京人類學會
- 鶴飼堅証 1994「蜷塚K式土器」『縄文時代研究辞典』戸沢充則編 東京堂出版
- 大塚達朗 1983「縄文時代後期加曽利B式土器の研究（Ⅰ）」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2号 東京大学文学部考古学研究室
- 大塚達朗 2000「第3章 山内型式論の再検討」『縄紋土器研究の新展開』同成社
- 大塚達朗 2015「解題」『縄文時代後・晩期土器編年の研究－加曽利B式～安行式土器群の変遷－』六一書房
- 大場利夫・扇谷昌康 1953『エリモ遺跡』日高教育研究所
- 大場利夫・石川徹 1956『手稲遺跡』手稲町役場・手稲町教育委員会
- 小栗鉄次郎 1932『西尾市大字上町八王子貝塚』愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第10号 史蹟其八 名勝其四 天然記念物其十 愛知県郷土資料刊行会
- 長田友也 2019『今朝平遺跡 第一分冊 遺構・土器』豊田市埋蔵文化財調査報告書第79集 豊田市教育委員会
- 長田友也 2019『今朝平遺跡 第二分冊 土製品・石器・自然化学分析・考察』豊田市埋蔵文化財調査報告書第79集 豊田市教育委員会
- 長田友也 2020「愛知県今朝平遺跡発掘調査報告・補遺」『三河考古』第30号 三河考古学談話会
- 金内 元 2002「アチャ平遺跡上段・斜面部出土土器の様相と時期区分」『アチャ平遺跡上段』朝日村文化財報告書第21集 新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 金内 元 2002「アチャ平遺跡上段・斜面部出土土器の様相と時期区分」『アチャ平遺跡上段』朝日村文化財報告書第21集 新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 金内 元 2012「下越地方における縄文時代後期前葉末～中葉の土器について」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 金子優子 2001「元屋敷遺跡出土の縄文時代後期前葉土器について」『新潟県考古学談話会会報』第23号 新潟県考古学談話会
- 金子優子 2002「奥三面における後期前半の土器様相」『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』縄文セミナーの会
- 加納 実 2008「堀之内式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 櫛原功一 1986『豆生田第3遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告第4集 大泉村教育委員会
- 櫛原功一 1987『姥神遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告第5集 大泉村教育委員会
- 櫛原功一ほか 1997『社口遺跡第3次調査報告書』高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団
- 工藤肇 2000「柏原Ⅰ～Ⅳ式について」『苫小牧市埋蔵文化財センター所報2』苫小牧市埋蔵文化財センター
- 河野広道・名取武光 1938「北海道の先史時代」『人類学・先史学講座』第六巻 雄山閣
- 児玉作左衛門・大場利夫 1952「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』第七輯 北海道大学北方文化研究室
- 品田高志 2001『十三本塚北遺跡』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第37集 柏崎市教育委員会
- 縄文時代プロジェクト 2013「神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅸ－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その4－堀之内2式土器の変遷－」『研究紀要』18 公益財団法人かながわ考古学財団
- 縄文セミナーの会 1996『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

- 縄文セミナーの会 2002 a 『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会 2002 b 『第15回縄文セミナー後期前半の再検討-記録集』 縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会 2012 『第25回縄文セミナー 縄文後期土器の研究と現状』 縄文セミナーの会
- 菅谷通保 1996 「南関東東部後期中葉土器群の様相」『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 杉浦敦太郎 1974 「八王子貝塚」『西尾市史』1 西尾市
- 鈴木克彦 2005 「東北南部後期前葉、中葉の番匠地編年の再検討」『縄文時代』第16号 縄文時代文化研究会
- 鈴木克彦 2008 「宝ヶ峯式・手稲式土器」『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション
- 鈴木徳雄 2012 「堀之内式土器研究の諸問題」『第25回縄文セミナー縄文後期土器研究の現状と課題』 縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 2018 「縄紋後期前半における土器型式の存立構造-関東信越地域の「型式」と諸“類型”」『地域考古学』3 地域考古学研究会
- 鈴木正博 1980 「加曾利B1式精製土器様式（概説）」『大田区史（資料編）考古Ⅱ』 東京都大田区
- 鈴木正博 1981 「第1章 加曾利B1式土器研究の基礎」『中妻貝塚の研究Ⅱ』 貝塚文化研究会
- 鈴木正博 1995 「「土偶インダストリ論」から見た堀之内2式土偶-土偶の編年の位置は土器から、土偶間の動態性は土偶から-」『茨城県考古学協会誌』第7号 茨城県考古学協会
- 鈴木保彦 1977 『下北原遺跡』神奈川県埋蔵文化財報告14 神奈川県教育委員会
- 鷹野光行 1978 「北海道における縄文時代後期中葉の土器の編年について」『考古学雑誌』第63巻第4号 日本考古学会
- 鷹野光行 1981 「北海道の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』 雄山閣
- 東海縄文研究会 2015 『東海縄文研究会第12回研究会（愛知4）八王子式土器-西尾市八王子貝塚出土土器-（資料集）』
- 名取武光 1939 「北海道の土器」『人類学・先史学講座』第十巻 雄山閣
- 名取武光・松下亘 1969 「縄文後期文化・北海道」『新版 考古学講座3』 雄山閣
- 浜松市教育委員会 1960 『蜷塚遺跡その第三次発掘調査』 浜松市教育委員会
- 浜松市教育委員会 1961 『蜷塚遺跡その第四次発掘調査』 浜松市教育委員会
- 浜松市教育委員会 1962 『蜷塚遺跡総括編』 浜松市教育委員会
- 久永春男 1969 「縄文後期文化・中部地方」『新版考古学講座 先史文化』第3巻 雄山閣
- 平林 彰ほか 2018 『ひんご遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書118 長野県埋蔵文化財センター（財）北海道埋蔵文化財センター 1989 『小樽市 忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北埋調報第53集
- 増子康眞 2010 「東海西部の縄文後期中葉型式群の形成と終末」『古代人』69 名古屋考古学会
- 松井直樹 2000 『八王子貝塚Ⅰ-縄文時代中期・後期前葉編-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 西尾市教育委員会
- 松井直樹 2001 『八王子貝塚Ⅱ-縄文時代後期中葉前半編-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集 西尾市教育委員会
- 松井直樹 2002 『八王子貝塚Ⅲ-縄文時代後期中葉後半編-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集 西尾市教育委員会
- 松井直樹 2003 『八王子貝塚Ⅳ-石器・石製品・骨角器・土偶・土製品・小形土器-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集 西尾市教育委員会
- 松井直樹 2005 『八王子貝塚Ⅴ-縄文時代中期・後期前葉期-』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集 西尾市教育委員会
- 馬目順一 1982 「南東北」『シンポジウム堀之内式土器の記録』 市立市川考古博物館
- 三田村美彦 1999 「第12章 山梨県の考古学編年（13）後期」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』 山梨県
- 向坂綱二 1995 「蜷塚遺跡」『日本古代遺跡辞典』大塚初重・桜井清彦・鈴木公雄編 吉川弘文館
- 向坂綱二 1996 「蜷塚式土器」『日本土器辞典』大川清・鈴木公雄・工楽善通編 雄山閣
- 百瀬長秀 2013 「八王子貝塚層位資料」『三河考古』23 三河考古刊行会
- 森田知忠 1981 「北海道縄文後期の土器」『縄文土器大成3』 講談社
- 森本隆寛 2019 「愛知県豊田市今朝平遺跡出土の後期前葉土器群について」『東海からみた後期前葉土器群』その2 東海

縄文時代研究プロジェクトチーム

縄文研究会第8回例会 東海縄文研究会

- 山内清男 1939a『日本遠古之文化 補註付・新版』先史考古學會
山内清男 1939b「加曾利B式（古い部分）」『日本先史土器図譜』(1967再版) 先史考古學會
吉崎昌一 1965「北海道」『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社
領塚正浩 1994「堀之内貝塚の考古資料（1）－東京大学人類学教室昭和26年発掘資料について－」『市立市川考古学博物館年報』22号 市立市川考古博物館